

## ヘンリー・ジェームズのアメリカ観 (5)

藤野 早苗

『鳩の翼』(*The Wings of the Dove*)は1902年にニューヨークのスクリブナー社から出版されたが、1894年11月3日、および7日の「ノートブック」に、すでにこの物語の構想についての詳細な記述がある。当時劇作に専念していたジェームズらしく、この物語を「3幕劇」として考えていたようだ(106)。さらに翌年の2月14日の記述には、この物語がすばらしい可能性をもったものであることを確認する短い言及があるが、以後記述は途絶えてしまっている。そして小説として実際に書かれ始めたのは1901年になってのことである。この間は拙論「ヘンリー・ジェームズのアメリカ観」(4)でみてきたように、ジェームズの作家としての生き方にも、イギリスについての見方にも大きな変化がみられる時期である。自信をもって書いた『ガイ・ドムビル』(*Guy Domville*, 1895)が上演されたものの、惨めな失敗に終わり、大打撃をうけたジェームズは劇作を断念するが、劇作の経験を「シーニック・メソッド」(scenic method)として小説に生かしていくことになる。だが自分の劇を理解しなかったイギリスの観客についての失望は大きく、かつてジェームズを魅了していたイギリス社会にも幻滅していくのだ。このような背景を理解した上で、小説『鳩の翼』を読む必要があるだろう。

作者の「序文」によると、この小説は「人生の可能性を大いに意識しながら、若くして不治の病におかされ、この世への限りない愛をもちながら、遠からず死ぬ運命にある人」(v)(1)という人物像の着想のもとに書かれたものであるという。その一方で、1902年のフォード・マードックス・フォードへの手紙では、「主題はデンジャーとケイト・クロイの物語にあり、ミリーの物

語はそれに組み込まれた一部に過ぎない」(Letters IV 239) と言っている。一見矛盾するようにみえるこの二つの言及は、まさにこの小説のからみあう主題を示している。本稿は、生を希求しながら遠からず死ぬ運命にあるミリーが巨万の富をもつアメリカ人であること、そしてデンジャーとケイトはイギリス人であり、物語の背景はロンドンであることに着目しながら、この小説の主題について考察する。そうするとき、この時期のジェームズのアメリカ観がみえてくるであろう。

## I

ミリセント・ベルはこの小説が20世紀初頭の社会と経済を正確に把握しており、そこに物語の言語も全体のデザインも基盤を置いていること、つまり、『鳩の翼』は何から何まで金銭に関するものであるという見方が可能であることを指摘している(291)。1881年から83年にかけてジェームズは両親の相次ぐ死と前後してアメリカを再訪したが、目に余る商業主義に辟易として、自分の住む場所はヨーロッパであることを再認識した。しかし消費文明は次第にイギリス社会にも浸透して、この物語の舞台であるロンドンは上流社会から貧困層までそれぞれのレベルで金銭欲が渦巻いている。

物語は母親の死後、金持ちの伯母ラウダー夫人のもとに引き取られているケイトが貧しい父親ライオネル・クロイを訪ねる場面から始まる。ケイトには恋人デンジャーがいるが、貧しいジャーナリストであるために、伯母に認めてもらえない。ケイトはデンジャーとの愛を貫くために、伯母の家を出て、貧しい父親と暮らすことを考え、相談に来たのである。だが、父親はそんなケイトを寄せ付けない。ラウダー夫人は父親との縁を切ることを条件にケイトを養うことにしているのだが、ライオネルは親子の情よりも、娘を手放すことにより見返りとして得るだろう金銭を優先させているのである。「伯母様の考えでは、私にたくさん下さるんだと思うわ」とケイトが言うと、彼は顔を輝かせて、「だけど品目(item)をあげてくれたのかい」と具体的に何をどれだけもらえるのか、自分の取り分を気にしていることがわかる。さらに、次に引用するライオネルの言葉には、まことしやかにモラルの低下を嘆きなが

ら、彼の意識は「ビジネスの意識」であることが明らかだ。

俗悪化した、人間性の失われた今日の生活じゃ、家族の情というものが、まったくなくなっちゃった。昔はわしのような男でも——うん、わしのような親でもという意味だがね——おまえのような娘にとって、立派な価値をもっていたものだ。つまり、ビジネスの世界で、「資産」(asset)とか呼んでいるものだろうよ。(I, 17)

ビジネスとは無関係の零落した生活をおくっているライオネルだが、まさにビジネスの感覚で物事を見ていることがわかる。彼にとって「価値」とは「金銭的価値」に他ならない。

自分への援助を視野に入れて、ケイトがラウダー夫人のもとにとどまることを強く主張するのは父親ばかりでなく、貧しい牧師と結婚して寡婦となり、4人の子供たちをかかえて貧困にあえぐ姉マリアンもそうである。このような父親や姉の要求があるとき、ケイトは伯母の家を出ることはできないと思う。しかしケイト自身が、物質的豊かさに強く引かれていることも事実である。母親の死後引き取られた伯母の家の華やかな世界に接したとき、物質的な贅沢に魅了されたのだ。たとえ父親や姉の反対がなくても、彼女自身、伯母のもとを離れられたとは考えにくい。ケイトは恋愛と贅沢の両方を手に入れたかったのだ。そのための画策がこの物語のプロットとなっていく。

ところで上流社会の人であるラウダー夫人はライオネルやマリアンと違って、金に困っているわけではないのに、金銭感覚は鋭い。ランカスター・ゲイトの豪華な家で、堂々とした家具に囲まれて生活する夫人は、エリザベス・アレンの言葉を借りれば、「社交界での彼女の立場を強めるために」(150)金が必要なのである。所有物は所有者の物理的、財政的状况を示すばかりでなく、その人のモラルもあらわすといえよう。彼女は世の中の関係すべてを経済力と結び付けていた。金はすなわち力であり、自分の意志を発揮させることを可能にするものなのだ。ラウダー夫人は堂々として威厳があり、顔の色艶もよく、いつもサテンの洋服を着て、きらめくビーズや、輝く宝石を飾り、メノウのような目と黒々と艶のある髪をした、まさに派手な俗物根性まるだ

しの女性として描かれている。ケイトの目からみると、「伯母様は何も怖いものがない」(I, 32) ようにみえるのであった。そういう巨大な存在感をもったラウダー夫人をケイトはひそかに「市場のブリタニア」(I, 30) と呼んでいた。ラウダー夫人の存在をこれほど適切に表現する言葉もほかにないであろう。彼女の君臨する場所は「会計事務所」であり、鉛筆を耳にはさんで、ポケットは自分の顔を彫ったコインでいっぱいであるようにケイトには思える。また「彼女は防御の装一式にヘルメット、盾、槍、そして元帳が加わらなければ満足しないだろうと思われた」(I, 31) とあるが、これはロンドンの上流社会に対するジェイムズの強烈な皮肉と言えないだろうか。気ぐらい高くふるまっても、金銭取引、金銭の計算が不可欠な要素になっていることに対してである。

ラウダー夫人がケイトの相手にと考えているマーク卿が「ここでは誰でも、見返りを考えずには何事もしませんよ」(I, 160) と言っているように、ランカスター・ゲイトを支配しているのは「取引」の原理である。ケイトの言葉によれば、「何にせよ提供するものを持っている人は——そういう人は本当に少ないんだけど——それを使って最大限可能な取引をするのよ。そして少なくともそれに見合った価値を受け取るの」(I, 179) ということになる。この取引の原理はマーク卿の場合には有効である。彼は経済的には困窮しているが、田舎に大邸宅を持つ貴族である。かつて短期間、上院議員をつとめたこともある。人格的高貴さはおよそ感じられないマーク卿だが、彼の価値はその背景にあるのであり、社交界に君臨しようとするラウダー夫人にとって、ケイトの相手とする価値があるのだ。

一方、経済力のない上に、名士でもないデンチャーは「とても量が足りなくて」(I, 82) 取引は成立しない。ラウダー夫人は個人的にはむしろデンチャーが気に入っている様子なのだが、ケイトを社交界の高みにのぼらせて、光り輝かせたいと願っている夫人の目から見ると、ケイトの結婚相手としては受け入れられない。金銭欲の渦巻く社会にあっては、デンチャーは確かに異例であろう。彼は金持ちになる方法は数々あると想像することはできたが、それは他人のものであって、自分には実行できないと思うのである。物質的贅

沢には関心がなく、内面的思考の世界を楽しんで生きている彼と、ラウダー夫人の価値観は相容れない。

ケイトがデンチャーに強く惹かれ、愛するようになったのはまさにデンチャーの知性や精神面の豊かさに、自分の身边に見ない魅力を感じたからであった。今あるがままの状態で結婚しようというデンチャーの願いに、一度はその愛を優先させようとした彼女だが、周囲からの重圧に加えて、彼女自身の贅沢な生活への執着がそれを許さなかった。ジェイムズは物欲に支配されているロンドン社会の状況こそ、ケイトの生き方をゆがめる原因であるという見方で書いている。

この物語の登場人物はミリーとストリングム夫人の二人を除いて、あとは全部イギリス人である。第一部、第二部でイギリス人の登場人物の相互関係、それぞれの考え方をケイトとデンチャーの視点からとらえ、ロンドン社会の雰囲気を描き出していく。そして第三部ではじめてアメリカ人の二人が登場する。ミリーはやせこけて顔色が悪く、赤い髪の毛が目立つ22歳の女性で、喪中にしてもひどく真っ黒な衣服をまとっている。ジェイムズはこのように外観はおよそ魅力的とは言えないこの若いアメリカ人女性が、またたく間にロンドン社交界にもてはやされる存在になっていく様子を、人々の彼女への対応の仕方をおして示していく。

ストリングム夫人とは学校友達ではあるが、その後親しくしていたのでもないラウダー夫人がすぐさま二人をホテルに訪ねたり、社交界の人々を招いての晩餐会を二人のために催したりするのは、マーク卿が「(ラウダー夫人は)自分の金を取り戻すでしょう」(I, 31)と言っているように、下心が関わっていることである。そういうマーク卿自身、初対面の席で、「あなたを見たら、誰でも飛びかかりますよ」(I, 155)と露骨な言葉をミリーに投げかけている。このようにロンドン社交界の人々がミリーを狙っている理由は紛れもなく彼女の富である。

それではジェイムズはミリーをどのような背景をもった人物として描いているのであろうか。身元についての詳しい説明はないが、繰り返し強調されているのは彼女が莫大な財産をもっていることである。しかも家族はみんな

死んでしまっ、残っているのはミリー一人だけだという。ロンドンにやってきた理由は、はっきりとは書かれていない。ニューヨークで取材のために出張中だったデンチャーに3回ほど会い、好感をもったことから、彼に会う目的できたのではないかということが、同行のストリングム夫人の想像を通して示唆されている。

注目すべきは、ジェイムズはミリーをきわめて自由で、金持意識のない、金に淡泊な人間として描いていることである。それが金銭感覚の鋭いロンドン社交界の人々と好対照を成す。たとえば財産についてラウダー夫人とミリーの態度の違いについて、次のような叙述がある。

モード伯母さんは何というか自分の金の上にしっかりと根を下ろし、自分の金に囲まれて、そのど真中に座っている感じがした。自分の金のことをよく知り尽くしているにもかかわらず、あたかもそれがなくなるとく、目をぎらぎらさせながら凝視しているのであった。ミリーはといえば、彼女の欠点かもしれないが、そのような身構えはまったくなく、言うなれば、自分の金の端っこにいた。(I, 196)

ラウダー夫人は目的や野心のために財産を守ることに躍起になっているのに対し、ミリーは財産を守る動機もないように見える。実際、ミリーは「なくそうとしても、なくせないほどの金持——それこそ本当の金持」(I, 121)であったのだ。つまり、ミリーの財産はラウダー夫人のそれとは比較にならないほど莫大であり、その差が財産に対しての淡泊な態度に表れているといえよう。このようにジェイムズは両者を対比させることにより、19世紀から20世紀にかけてのアメリカの産業資本による莫大な富の蓄積と対照的に、ヴィクトリア朝の栄光も過ぎ去ったなかで、消費文明の波を受けながら、物質欲にもえるロンドンの人々の心理を描きだしているように思われる。しかもミリーが一人例外的な金持ではないことは、デンチャーがアメリカに出張したときに、ミリーのことは特に記事として書かなかったことから推測できる。

「ニューヨークでは何でもなくても、イギリスではもてはやされる人はたくさんいる」(II, 39)とのデンチャーの言葉からして、ミリーはもてはやされ

ても不思議ではないのだが、さらに彼女の場合には巨万の富に加え、健康上の問題があることがわかってくる。病名は不明なのだが、重症で、余命幾ばくもないらしいことをケイトをはじめ、ミリーの身辺の人々がかぎつける。そのことからそれぞれの目的に照らし合わせての画策が始まり、物語が進展していくのである。

## II

ミリーが生を希求する人間であることは最初に登場したときから示されている。ロンドンに到着する前にアルプスの山の中で、ミリーは一人で山頂に向かって行き、危険な崖の上に座っていた。その姿を見てストリングム夫人は何も言わずにそっと戻っていくが、彼女が受けた印象はミリーは長くは生きられないだろうということと同時に、しかしミリーはしっかりと自分の生を見つめて生きていこうということであった。ロンドンを訪れる理由の一つは、健康を危惧するミリーが著名な医師ストレットを訪れることであったとも考えられる。医師は診察の結果、特に何も治療の必要はないこと、何をしてもよいこと、とにかく「生きること」を熱心に説く。またミリーには幸せになる権利があること、幸せになるべく決心する必要があることを話す。このような医師の言葉に、ミリーは疑うべくもなく自分が重病人であることを意識して、愕然とする。だが次の引用が示すごとく、ミリーはアメリカ人らしい前向きの姿勢をすぐに取り戻す。

以前には心配もしなかった健康の美は失われてしまったことは確かだ。それはもう永久に過去のものになってしまった。けれどもその代わりに偉大なる冒険という考えの美——今までにないほどに責任をもって対処しなければいけない、何かはっきりしないが大きな実験、あるいは苦しみ——が提供されたのだ。(I, 248)

そしてミリーはそれに果敢に立ち向かうことを決意する。ストレット医師に一度だけ胸中の苦しみを訴えたミリーだが、しっかりと生きる決心をしてからは誰にも悩みを訴えることはなく、病人であることを周囲に感じさせな

い明るさで振舞うのである。

ミリーの秘密を察して、それを自分に利する方策を考えるのがケイトである。時間をかけて伯母の心を変えさせ、デンチャーとの恋の成就をねがうケイトだが、なかなか思うようにならないときに、ミリーの秘密ばかりでなく、ミリーのデンチャーに対する熱い思いを感知したことから、彼女にはある考えがひらめいた。不治の病にあるミリーをデンチャーと結婚させ、彼に財産を残させようというものである。彼女としてはきわめて合理的と考えるこの計画だが、ここでは愛情が方便として使われていることを注視する必要がある。それだけではなく、ケイトはその計画はデンチャーに愛されたいというミリーの願いを満足させることになり、ミリーにも恩恵を与えるものであるという理論を立て、デンチャーに同意を求めることにも注意したい。「彼女を楽しませてあげたいの。そのために私が持っているものを使うのよ。あなたは私がもっているもののうちで一番大切なもの、だからあなたを一番役立てたいのよ」(II, 52)といかにも理路整然と話すケイトだが、平気で愛情を取引に使おうとしているのである。

相思相愛ではあるが、もともとケイトとデンチャーには価値観に根本的な相違がある。物質欲の強いケイトと異なり、デンチャーは貧しくても内面を大切にしたい人間である。したがって、愛情を偽ってミリーに接近し、その結果手にするであろう遺産でケイトと結婚すれば、みんなが幸せになるなどという考え方はどうにも理解できない。そのデンチャーの心に揺らぎが起こるのはミリーがヴェニスで住むことになった古い宮殿でのパーティーの時である。ずっしりとした豪華なパールのネックレスをしたミリーに、ケイトとデンチャー二人の目がいく。ジェイムズは「シーニック・メソッド」によって、二人の気持ちの動きをまるで舞台上で演じられているように描写していく。「シーニック・メソッド」は「ピクチャー」とよばれる説明の部分と、「シーン」とよばれる「会話」の部分からなるのだが、ミリーの豪華なパールを見ながら、そこにケイトは「力」を感じ、それは富の力であること、パール（富）は誰にでも似合うことを強調する。そのパールを見ながら、デンチャーはそれをケイトがつけたらどんなに似合うことだろうと言う。「そうね」と相槌をうつ



ケイトを見た瞬間、デンチャーはケイトが意味していることが痛いほどわかる。つまり、ミリーのパールは持っている者と持たない者との「違い」を象徴的に表わすものであること、そしてデンチャーは決してそれをケイトに買ってやれないことを、ケイトの表情は歴然と示しているのだ。

デンチャーの気持ちに揺らぎを見るや否や、ケイトはミリーの具合が悪いこと、しかしそれは自分たちの計画には何の関係もなく、自分たちはただ彼女のために最善をつくせばよいこと、つまり、「私たちは彼女に生きる意欲をもたせることよ」(II, 220)と矢継ぎ早に言って、いかにも彼女の計画の「正当性」を説き、デンチャーの目をそちらに向けさせようとする。それからしばらく間を置いて、デンチャーの集中力が高まった頃合を見計らって、「彼女は死ぬ運命にあるのだから、僕が彼女と結婚するのだね」(II, 225)と彼の役割を彼自身にはっきりと言わせるように仕向ける。ケイトに巧みに操られて、デンチャーはいつのまにか自分の進むべき道を確認した形になる。計画を実行に移すための愛情の確証として、デンチャーはケイトにセックスを要求する。こうして二人の間で取引が成立することになる。ケイトがデンチャーを熱愛していることは確かであろう。しかし貧しい彼では満足できないのである。彼女は愛と富の両方を手にするためには手段を選ばない、「いやなことでもできる女」(II, 226)なのである。そんなケイトの言うなりになるデンチャーはいかにも情けない男であるが、ジェイムズは「シーニック・メソッド」によって、デンチャーの心の軌跡の必然性を読者に納得させるように描いているのである。

ケイトはデンチャーの部屋で一夜を過ごす。「彼が指定した金額は気前よく支払われた」(II, 237)からには、デンチャーもそれに見合った仕事をしなくてはいけないことを認識する。そこで契約実行のため、デンチャーは恋人よろしくミリーを訪問することになる。ところが訪れてみると、不思議にも、ケイトとの約束を実行しているという感じがしなくなる。ミリーの心からの歓迎ぶり、率直さ、やさしさ、悲しみ、明るさ、すべてが自然なので、デンチャーの罪の意識は薄れて、自分の意志でミリーを訪問しているような気分になってくるのだ。

もともとデンチャーは他のイギリス人たちと異なり、ミリーのことを巨万の富とは結びつけずに、「アメリカ娘」として見ていた。それはデンチャーがミリーに出会ったのがニューヨークであり、彼女がロンドンで騒ぎ立てられているような特別な存在ではなく、自分に親切にしてくれた「アメリカ娘」という印象が強いからである。しかも、他のイギリス人と違って、金銭欲のないデンチャーにはミリーの魅力は彼女の富にあるのではなく、富に裏付けられているのであろうが、彼女のこの上なく自由で気楽な人間性に好感をもっていたのである。このように、この物語の中で唯一人デンチャーはミリーをあるがままに見ていることがわかる。付添い人のストリングラム夫人さえもミリーを「プリンセス」と呼んで、ロマンスの作家らしく、自分の想像の中にミリーを生かしているのだ。

限られた生命を知りながら、いや知ればこそ、生命を十分に燃焼させたいというミリーの願いは愛するデンチャーが傍らにいて、ますます高まっていく。次の引用は現実を認識しながら懸命に生きようとするミリーの心中と、彼女の気持ちに引き込まれていくデンチャーの姿が「シーニック・メソッド」の「シーン」によって鮮明に伝えられている例である。言葉少ない会話であればこそ、インパクトが大きい。

「私、生きられるってことよ」

「僕はそれを疑ったことはないよ」

「私ね」と彼女は続けた。「とっても生きたいの・・・」

「それで？」と彼は彼女が熱をこめて話して言葉が詰まっている間、つないだ。

「そう、私、絶対にできるのよ」

「どんなことでも？」彼は厳粛な気分になって言葉をつぐんだ。

「どんなことでも。したいと思えばね」

「したいと思えば？」

「私、生きたいと思えば、生きられるのよ」(II, 246)

「どんなことでも？」「どんなことでも」「したいと思えばね」「したいと思

えば」と同じ言葉を重ねていくことで、二人の意識が重なり合っていく様子が手にとるようにわかる。不治の病という危機的状況を互いに十分承知しているだけに、この繰り返される言葉は苦しい現実を乗り越える意志を確認しあう言葉にもなる。デンチャーと共にいることを心底喜び、懸命に生きようとしているミリーの姿に、彼は自分が彼女の運命に深くかかわっている、あるいは彼女の運命が自分にかかわっているという感じがしてくる。少しでも勝手な動きをしたら、ミリーを破滅に追いやるかもしれないという緊張感の中で、必死に彼女を支えたい気持ちになってくる。それはケイトとの約束によってミリーに近寄っているデンチャーではなく、ミリーの生を希求する心に自発的に引き込まれたデンチャーなのである。ジェイムズは1902年9月23日のウォード夫人宛の手紙で (*A life in Letters*, 372)、この物語の中心はデンチャーの意識にあるとして、もしケイトとの同意がはっきりと言葉で表現されていなかったら、そしてその言葉に彼が従っているのでなかったら、ドラマティックな意識とはなりえなかったと書いているが、まさにこの物語の核心が——主題も、ミリーの人物像も——そこに凝縮されているのである。

ケイトとの約束を守ろうとするデンチャーの意識には、彼女を愛するがゆえにするけれども、その行為は彼の意に反すものであることがはっきりしていて、良心の呵責を受け続けている。ゆえにミリーの生きたい願望に引き込まれて、ミリーの許しがなければ身動きできない状態になっていくことは、彼にとって苦痛というよりも、「平安」を感じるのだ。このようなデンチャーの意識が明らかにされてこそ、物語の結末の必然性も理解できるものとなる。

### III

ミリーとデンチャーの結婚と、そこから進展するはずだったケイトとデンチャーの結婚の予定を狂わすことになった直接の原因はマーク卿の中傷である。ケイトと同様にミリーの富を手に入れたい一心で、偽装結婚の申し込みをしたものの、あえなく断られてしまった彼は、思い切れずに、再びヴェニスにミリーを訪れて、デンチャーはケイトと婚約していることを暴露したのだ。それにより、「彼女は顔を壁に向けてしまいました」というストリンガム

夫人の言葉がすべてを物語っているように、ミリーは生きる力を失ってしまい、その後二度と外へ出ることはなくなってしまう。

デンチャーは一度だけ面会の機会を得るのだが、そのときの模様は描かれていないし、彼が詳細に語ることもない。ロンドンに戻ってからのケイトとの会話の端々から推測するのみである。しかし重要なことは、そのミリーとの会見がデンチャーの意識に与えた影響の大きさである。彼はストリングム夫人からマーク卿の言ったことを否定してほしいと頼まれていた。デンチャー自身も、ミリーから真偽を問われるものと覚悟していたのだが、20分間の会見の間、彼女は一言もそのことに触れなかったという。ケイトに問い詰められて、断片的に答えるデンチャーの言葉から推測できることは、ミリーはデンチャーとの最後の時を、いつもと同じように自然な態度で楽しんでいたらしいことである。無言のうちにデンチャーを許す寛大さと、最後まで生を燃焼させようとするミリーの美しさ、強さがデンチャーの心に深く刻み込まれたものと思われる。

ロンドンに戻ってからのデンチャーとケイトの会話は、二人の心が修復不能なばかりにバラバラになってしまったことを示している。たとえば、久しぶりに公園での会話だが、デンチャーが今すぐ、あるがままの自分と結婚してくれと言うと、ケイトは「すべてがとてもうまくいっているのに、突然私を捨てるつもりなの」(II, 348)と彼をとがめる。ケイトはミリーがマーク卿の中傷を否定して、デンチャーが愛しているのは自分だと信じ込ませたことをマーク卿からすでに聞いている。したがって、彼女の思惑どおりに、デンチャーは遺産を受けると確信しているのだ。ケイトにはミリーに対する罪の意識は皆無である。

結局ケイトの期待どおり、遺産の通知がくるが、デンチャーは封を開けることができない。それを受け取らずに結婚しようと再びケイトによびかけるが、ミリーの思い出があって、もはや元通りの二人の関係ではないことを悟った彼女は、遺産だけ受け取って別れることを示唆する結末になっている。「僕は彼女 [ミリー] を愛したことはない」と明言しているように、デンチャーがミリーに心変わりしたわけではない。そうではなくて、善良なるミリーに

罪を犯した悔恨の気持ちと、無言のうちにそれを許すミリーの寛大さ、そして最後まで生を燃焼させようとしたミリーの姿が、デンチャーの心に深い印象を残したのである。

ラウダー夫人はミリーの死を意味するのに、「ケイトの言う私たちのいとしい鳩はそのすばらしい翼をとじました。(中略) いえ、より大きく広げたと言った方が正しいかもしれません」(II, 356)と言う。デンチャーは苦しい思いがしたが、「そうですね。むしろ——より大きく広げたのですね」と夫人の言葉をそのまま受ける。その表現は彼の心の奥深くにあるミリーの姿にぴったりあてはまるのだった。だが、ラウダー夫が「きっと、より大きな幸せにむかって飛び立ったのですね」と続けると、いたたまれない様子で、「そのとおりですよ。より大きな」と口をはさんで黙らせてしまう。このシーンはさりげなく描かれているが、物語の主題を包括的に示している。このシーンを手がかりに、表題の「鳩の翼」の意味を考えてみたい。

「ケイトが言う私たちの鳩」とあるように、ミリーのことを「鳩」と呼んだのはケイトである。ミリーがロンドンにきて間もない頃、彼女を鳩と呼ぶが、このときは鳩をおとなしい、物静かな、やさしい鳥のイメージで、ミリーのもつ雰囲気さをしている。それはラウダー夫人の「雌ライオン」のイメージ、あるいはケイトの「ヒョウ」のイメージと対比されるものである。鳩は雌ライオンやヒョウにいつ襲われないとも限らない。しかし、ヴェニスの宮殿でのパーティーで、豪華なパールのネックレスをつけているミリーを見たとき、ケイトの目に映る鳩のイメージは富という力を備えた、「すばらしい飛翔力をもった」鳥のイメージであることを、同時にミリーを見ていたデンチャーが理解するのである。ケイトがその鳩のイメージに圧倒されていることをデンチャーはよみとり、それがケイトの計画に同意するはずみとなる。このとき彼はさらに、鳩はその翼を広げて他のものを守ってやる力もあるのではないかと、おぼろげながら考える。実際のところ、自分たちがみんな——特に自分が——便宜を求めてミリーの翼のもとに身を寄せているのではないかと……。この場面はデンチャーが状況をよく把握していたことを示している。ケイトに先導されたにせよ、少なくともこの時点で、デンチャーはミリーに保護を求め

る——ミリーの遺産をあてにする——べく、ミリーに近づくことを決意したのだ。

だが物語の展開が示したように、デンチャーは意図したこととは別の意味で、ミリーの庇護を受けることになる。生を希求し、最後まで生を喜ぶ心、罪を許す寛大さで、鳩の翼は大きくデンチャーを覆ったといえる。悔恨の念に苦しむデンチャーには、ラウダー夫人の「より大きな幸せにむかって飛び立ったのですね」という儀礼的な言葉はいかにも無責任で、つらいのである。このようにジェイムズはデンチャーの意識の軌跡を「鳩の翼」のイメージをめぐって、みごとに表わしているのである。

ところで『鳩の翼』という題名は『旧約聖書』の「詩編」第55編と第66編に由来しているものと思われる。「詩編」第55編ではダビデが仲間に裏切られて苦悩しながら、神を信じ、救いを待つ様子が書かれている。ダビデは「どうか、鳩のように翼をもちたいものだ。そうすればわたしは飛び去って安きを得るであろう」と述べているが、ここに「顔を壁に向けて」苦しむミリーの姿が重なる。

第68編では王国は神の祝福を受けることが書かれている。第13節には次のようにある。

たとい彼らは羊のおりの中にとどまるとも。  
鳩の翼は、しろがねをもっておおわれ、  
その羽はきらめくこがねをもっておおわれる。

苦しみを乗り越え、裏切りをした者たちを許し、愛の翼でおおったミリーに通じるのではないだろうか。ただし、「しろがね」「こがね」はミリーの「富」もかけていると考えられる。

#### IV

ミリーを『アメリカ人』(The American, 1876)のニューマンと比較してみると、25年の時の流れが二人の人物像に映し出されているのがわかる。無垢なアメリカ人が伝統あるヨーロッパを訪れるという構図は同じだが、ニュー

マンは14歳で世の中に出て独力で道を切り開き、勤勉努力の結果、35歳にして一生楽しめるだけの財産を築き上げた実業家である。自分で苦勞して稼いだものであるから、金銭については用心深い。一方、ミリーは次の世代の人間で、何の苦勞もせずに、親から巨万の富を引き継いでいる。その財産たるや、なくそうとしても、なくせないほどのものである。ニューマンと異なり、金持であることをひけらかしもしないし、金の力を特に信奉もしない。ニューマンが金に物を言わせて、「一番よいもの」を手に入れようとする19世紀後半に輩出したアメリカの新興成金の典型であるのに対し、ミリーは世紀末から20世紀初頭にかけての安定した大富豪の娘らしく、余裕がみられる。ヨーロッパの伝統にあこがれるニューマンが没落貴族の娘マダム・ド・サントレとの結婚を熱望したのとは対照的に、ミリーが心を寄せるのはニューヨークで出会ったジャーナリストのデンチャーである。富も地位もない彼はロンドンでは結婚相手としての評価は低い。だがミリーは貴族のマーク卿にはまったく関心がないのだ。

しかし二人の個人的な違いにも増して大きな違いは、ヨーロッパ社会の受け入れ方の違いである。気ぐらい高いベルガルド家がニューマンの表敬訪問すら容易に受け入れようとはしなかったのに比し、ラウダー夫人は自らホテルに訪ねたり、社交界の人々を招いてミリーのために晩餐会を催す。またマーク卿はミリーを自分の館に招く。このようなヨーロッパ社会の対応の仕方に、イギリスに在住のジェイムズがみるアメリカ社会の変遷が映し出されている。そのジェイムズの視点には当然彼自身のヨーロッパ社会についての思いが投射されていよう。『アメリカ人』を書いた当時、ジェイムズはヨーロッパを定住の地としたとばかりで、伝統あるヨーロッパで芸術を追求することに限りない充実感をもっていた。またロンドン社交界に招かれることにも大きな喜びを見出していた様子が、レオン・エデルの伝記からもうかがえる。だが『鳩の翼』になると、すでに述べたように、ロンドンの魅力も薄れてきて、社交界もうとましくなってきたようだ。

『鳩の翼』で際立つのは私利私欲のためには愛情も方便とするイギリス人のモラルの低さと対照的に、アメリカ人の崇高なまでに寛大な心である。そし

てそれをジェイムズは経済力に起因するとみているのである。ミリーの寛大さは「わたしは取引はしないわ」と言っているように、見返りを考えない、「与え、与え、与える」(II, 161) 姿勢からくるものである。それは何事も取引が行動の基準となっているイギリス人たちと好対照を成すことは明らかだ。

ケイトはミリーに「あなたはどんなことでもできるわ——私たちにはできない多くのことを」(I, 281) と言う。またデンチャーは「あなたは多分世界中でもっとも自由な人ですよ。あなたには何でもありますからね」と言う。ジェイムズは富の力をそのように万能であると考えていたのだろうか。いや、商業主義を嫌うジェイムズが富の力を過大評価するはずがない。ミリーは彼女自身が意識しているように、決して自由ではないのだ。一番大切なものは存在価値であり、それは巨万の富でも買えないものである。

---

(1) 引用文の邦訳はすべて拙訳。

## 引用文献

Allen, Elizabeth. *A Woman's Place in the Novels of Henry James*. London: Macmillan, 1984.

Bell, Millicent. *Meaning in Henry James*. Cambridge, Harvard UP, 1991.

James, Henry. *The American*. 1877. *The Novels and Tales of Henry James*. Vol. 2. New York: Scribner's, 1937. 26vols.

---. *The Complete Notebooks of Henry James*, ed. Leon Edel and Lyall H. Powers. Oxford: Oxford UP, 1987.

---. *Letters IV*. Ed. Leon Edel. Cambridge: Harvard UP, 1980.

---. *A Life in Letters*. Ed. Philip Horne. New York: Viking, 1999.

---. *The Wings of the Dove*. 1902. *The Novels and Tales of Henry James*. Vol. 19 & 20. New York: Scribner's, 1937. 26vols.